

天うつ浪

第二

幸田露伴

明治四十年一月 春陽堂

其二十三

よしや大吉ならぬまでもせめては凶ならぬ御籤を得て、憂に沈み悲に陥れる氣を引立て、信心の勇を附けて呉れんと爲たるらしき親切の老人が、思ふこと違ひて甚く望を失へるは、忽ち先づ其の色に現れて、僧より受取りし御籤をば、力無げに輪に巻きながら、鈍るく此方へ歩み來れるに、水野は見ずして既に其の文の凶なるを知れり。

第何十何番大吉といふならば、如何ばかりか悦び勇んで示すべきを、老人は巻きたるまゝ御籤を水野の懷中に軽く押入れて、

『何様か吉凶にかゝはらず御信心なさい。大吉でも驕れば凶に反ります、たとへ凶でも御信心を強くなすつて、それからまた改めて御籤を御戴きなすつてごらんさい、吉になりますこともございますものです。吉につけ凶につけ御信心が大切です。決して信を御冷しなすつてはいけません。さてそろそろもう下向いたしましやう。』

と、云いひ終はつて本尊ほんぞんをまた一拜いっぱいして、おのれ先まづ御堂みだうを去さらんとしたり。

老人らうじんが様子やうすの急きふにそはつけるは、何なんの意いも無なかりし我われに智ち慧ゑをつけて御籤みくじを取とらせたるに、その御籤みくじのことのほか凶あしかりしかば、却かへつて其そのために憂うれひを増まし、悲かなしみを添そふることもやと、氣きの毒どくさに堪たへかねて傍かたへに居ゐづらく狭せまくして正直しやうちきなる心こころの憫あはれにも落着おちつきかぬるが爲ためなるべし。平生ひごろの我われを知らずして、たゞ自己おのが身みにのみ比較ひきくらぶれば、然まる心遣こころづかひをするも無理むりならねど、御佛みほとけの廣大くわうだいなる御誓願みんちかひをこそ頼たのみ奉たてまつりつれ、御鬬みくじといふ事は御經ごきやうにも見みえず、賣僧まいそうの仕出しだしたるなるべき春はるの遊戯あそびの寶引はうびきといふにも似にたる埒らち無く據よりどころ無なき御籤みくじの文ぶんなどに、我われいかに心こころを動うごかされんや。それとも知らずして性質ひとの好きよき老人らうじんの、心こころを遣つかふ笑止せうしさ、と水野みづのは却かへつて老人らうじんを憐あはれ、わざと懷中くわいちゆうの御籤みくじを其儘そのまにして讀よまず。共に石路せきろの長々ながくしきを下向げかうしけるが、老人らうじんは懷中ふところより折をり本ほんになりたる普門品ふもんひんの小きを取り出いだして、

『だいなしになつて居をりまする物を、呈あげると申まをしては失禮しつれいですけれど、

まあ如^か是^しいふ物^{もの}の事^{こと}ですから御免^{ごめん}下さい。これを貴君^{あなた}に差上^{さしあ}げますから、何様^{どう}か御取^{おと}りなすつて下さいまし。私はもう無書^{そら}で記^{おぼ}えましたから、此書^{これ}は用^{よう}が明^あいたのでございますが、何様^{どう}か貴君^{あなた}も御拜^{おが}みなさるたびに、これを御覧^{ごらん}になりながら御經^{おきやう}を御あげなすつて下されば、私^{わたくし}は大變^{たいへん}に嬉^{うれ}しいと思^{おも}ふのでございます。それに此^この末^{すゑ}の方に私^{わたくし}の名住^{なとこ}所^ろが小さく書^かいてございますから、何ぞの御序^{おついで}でも御有^{おあ}りでしたら御立寄^{たちよ}り下さいまし、いろ／＼御利生^{ごりしやう}の御話^{おはなし}やなんぞを致^{いた}しましてやうから。ではまた明日^{みやうにち}御目^{ごめ}にかゝりましてやう。どうか撓^{たゆ}まずに御信^{ごしん}心^{ぐん}なすつて!。』

と云^いひたき事^{こと}のみを云^いひて終^{つひ}に別^{わか}れたり。冊子^{ほん}は言^{ことば}を費^{つひや}して辭^{いな}むべきほどのものにもあらず、特^{こと}に快^{こゝろよ}く受^うけ納^{をさ}めて芳志^{こうざし}を無^むにせざらんは、差^さし當^{あた}つての道^{みち}なるべしと、水野^{みづの}は老人^{らうじん}に厚意^{かうい}を謝^{しや}して、袖^{そで}を分^{わか}つて東方^{ひがし}へ去^さりつ、先づ普門^{ふもん}品^{ほん}を懷^{ふところ}中^{ちゆう}に入るゝに、巻^まきたる彼^かの御籤^{みくじ}のかさ／＼と手^てに觸^ふれたれば、引交^{ひきちが}へて取^とり出^{いだ}して其文^{そのぶん}を讀^よむに、

